

# 「天下図」に現れる世界観

権 静\*

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 「天下圖」の起源
  3. 「天下圖」に見える鄒衍の世界観
  4. おわりに
- 

## 1. はじめに

日本の中世において世界は天竺(インド)-中國-本朝(日本)の三國で形成されていた。それを良く示しているのが所謂「仏教系世界地図」であるが、その名から推測できるように、日本に直接仏教を伝授した韓半島が三國から排除されている。しかし、韓半島を彼らの世界観から完全に排除することは不可能だったようであり、それは韓半島を包含する「五天竺図」と排除する「天竺國図」の二図の揺れから窺い知れる<sup>1)</sup>。ここでは日本の古地図と比較して、中世の韓半島ではどのような地図が普及していたのか、そしてそこから何を読み取ることができるのかについて考察していきたい。

現在韓國に伝わっている古地図の中で、「天下圖」と呼ばれる地図は日本の「仏教系世界地図」とはその様相を異にし、その特異な概観から察せられるように、独自の世界観を示している。その起源は、朝鮮時代初期と推定されているが、現在目にすることが出来るものは、ほとんどが十七世紀以降に製作されたものである。この図はその奇異な外見によって、日本を含む世界の地図収集家から珍重されてきたが、その製作者及び製作年代は明らかにされていない。またこの地図が單獨で伝えられていることは稀で、「輿地圖」「天下輿圖」「東國地圖」または「地圖」との冊名が付いている地図帖の一部として伝えられている。その中でも大英博物館所蔵本が最も早い作品であると指摘されており、それは、四海總

---

\* 배재대학교 책임강사 비교문화비교문화

1) 詳しくは「古地図にあらわれる日本の世界観」『日本文化學報』第13輯 2002年 5月

図、中國図、日本國図、琉球図、朝鮮八道の總図、及び各図、二種類の都城図の計十五種で成立している。現在韓國に伝えられている國立中央図書館所藏の「天下圖」がこの系統を引き継ぐものと見なされており、また韓國で大英博物館系図としては實際目にする事の出来る唯一のものでもあるため、この地図をもとに考察を進めていくことにする。中央図書館所藏の「天下圖」は『輿地考覽圖譜』と名づけられている地図帖の一部で、安鼎福(1712-1791)の手澤本とされている。安鼎福は、李朝の學者で彼の主な著書としては『天學問答』、『東史綱目』、『列朝通記』を擧げることができる。彼については後に詳細に述べることにする。

この「天下圖」の概観は人間の横顔を連想させるもので、中央大陸とそれを囲む環大陸、そしてその間に内海が描かれ、この内海には多くの島が散在している。この図に描かれている地名を分類すると、國名が89、山名が39、河川名が5、沼澤名が5、樹木名が3、その他3であり、計144個の地名が書き込まれている。その地名の中で実際に存在する國の名は、ほとんどが中心大陸に書かれていて、内海及び環大陸の地名は日本と琉球を除いては『大唐西域記』(646)、『洞天福地岳瀆名山記』(901)に記されている仮想的な國の名に依るものである。それでは地図の検討に入る前に、この「天下圖」に關して今までどのような研究がなされてきたのか、以降見ていくことにする。

「天下圖」に關する日本での主な研究書には、中村拓“Old Chinese World Maps Preserved by The Koreans”<sup>2)</sup>、海野一隆「朝鮮李朝時代に流行した地図帳—天理図書館所藏本を中心として—」<sup>3)</sup>、同「李朝朝鮮における地図と道教」<sup>4)</sup>などがある。一方、韓國での主研究書には、李燦「韓國の古世界地図—天下図と混一疆李歷代國都之図—」<sup>5)</sup>、「韓國の古世界地図に關する研究」<sup>6)</sup>、金相運「李朝初期の地理學と地図」<sup>7)</sup>、慮禎埴「韓國古世界地図の特色とこれに關する外來的影響に關する研究」<sup>8)</sup>、慮禎埴「韓國古地図資料とその研究成果と新しい方向模索のための一研究」<sup>9)</sup>、慮禎埴「古地図に顯れた外國地名を通じて見た視野の擴大」<sup>10)</sup>などがある。

中村拓は上の論文で、「天下圖」とはその外見から仏教系地図である法隆寺所藏の「五天

2) 中村拓“Old Chinese World Maps Preserved by The Koreans”(Imago Mundi IV, 1948)。

3) 海野一隆「朝鮮李朝時代に流行した地図帳—天理図書館所藏本を中心として—」(『ヒブリア』七十号、1978年)。

4) 海野一隆「李朝朝鮮における地図と道教」(『東方宗教』57号、1981年)。

5) 李燦「韓國의 古世界地圖—天下圖と混一疆李歷代國都之圖—」(『韓國學報』一志社、ソウル、1971年)。

6) 李燦「韓國の古世界地圖に關する研究」(『ソウル大教育大學院』、1971年)。

7) 金相運「李朝初期의 地理學と地圖」(『ソウル大學教育大學院』、1971年)。

8) 慮禎埴「韓國古世界地圖の特色とこれに關する外來的影響に關する研究」(『大邱教育大學論文集』18集、1982年)。

9) 慮禎埴「韓國古地圖資料とその研究成果と新しい方向模索のための一研究」(『大邱教育大學論文集』13集、1977年)。

10) 慮禎埴「古地圖に顯れた外國地名を通じて見た視野の擴大」(『大邱教育大學論文集』22集、1986年)。

竺圖」と『圖書編』所載の「四海華夷總圖」を経て、それらを受け継ぐかたちで造られたものだとしている。また地図帖によって大きさ、色使い、題名は異なるが、人の横顔を連想させるその様相は変わらず、漢時代に中國で製作され、その後朝鮮に伝わって印刷術が発達した16世紀において流布したものと結論している。海野一隆は、「天下圖」は朝鮮で造られたもので、仏教系の「四海華夷總圖」及びリッチ系すなわち西洋系の單円世界図(山海輿地全圖)に触発されて誕生した道教系ないしは神仙的な世界図であるとし、その作成の動機は西洋系世界地図に對する對抗意識であったとしている。つまり西洋系地図に對抗できる地図として、仏教系地図は儒家にとっては好ましいものでなかったため、新しく道教的、神仙的な地図を考案して、俄か作りに見せないために地名は過去のものに限定させたと結論している。李燦は、中村拓の中國起源説を「天下圖」が現在中國にも日本にも伝わっておらず、韓國にだけ存在するとの理由で否定している。また海野一隆が「四海華夷總圖」、單円世界地図を「天下圖」の起源としているのに対して、これらの地図と「天下圖」とはあまりその形態が類似しておらず、これよりは鄒衍の世界観を示した「中國四方之海 是號裨海 其外有大陸環之 大陸地外 又有大瀛海環之方是地涯云」つまり「中國の四方にある海を裨海といい、その外を大陸が囲んでいる。またその大陸の外を瀛海が囲んでおり、これが地の涯である」という表現が、より「天下圖」に近いとしている。だがT-O図との関連も排除してはいない。また「天下圖」はその古い起源にもかかわらず、実際に伝えられているものは17世紀以後のもので、その種類も多様であるため、どれが原形でどのように発達してきたかは確かでない結論している。慮禎植は中國に伝わった西洋のT-O地図に中國人の世界観ないし仏教的思想が結付されて地図の輪郭が成立し、これが朝鮮に流入し轉寫されていく過程で多少の変化が付加されたと結論している。

以上、既存の研究書を見てきたが、「天下圖」の起源が明確でないため、いずれの研究も仏教系地図の影響である、または西洋の單円世界地図の影響であるという曖昧な結論を提示するに止まっている。だが仏教系地図と西洋地図とはその發生時期も異なり、各々示唆している世界観も異なるため、両方の影響を同時に蒙ることは不可能だと考えざるをえない。

それに「天下圖」は、印度を中心としている「四海華夷總圖」及び『法界安立圖』所載の「仁潮図」とは異なって中國を世界の中心に据えており、その面でもそれらの地図の様相を引き継ぐものとは考え難いのである。

それでは「天下圖」とはどのような過程を経て製作されたのか、この地図が朝鮮時代の長い間親しまれ廣く普及されていた理由はどこにあるのか、またそれが示唆する世界観とは如何なるものかについて以降考察していきたい。

## 2. 「天下圖」の起源

「天下圖」は上で述べたように、單獨ではなく地図帖の一部として伝わっている。ここで参照するものは、「韓國國立中央図書館」所蔵のものであるが、「大英博物館」所蔵のもの同様「中國圖」と「天下圖」が一緒に綴じられている。ここで注視すべきことは「中國圖」が、「天地圖」及び「二十八宿分應各省地理總圖」と酷似していることである。「中國圖」には、「天地圖」及び「二十八宿分應各省地理總圖」同様、二十八宿に相當する十二州が○で囲まれており、また「天地圖」、「二十八宿分應各省地理總圖」で、□で囲まれている十三省(山西、山東、河南、陝西、江西、湖廣、浙江、福建、廣東、廣西、四川、雲南、貴州)と南京、北京も○で囲まれている。そして図の下段部には各省と二京が二十八宿の何れに該当するのかが書き込まれている。これらの事實は「天下圖」と同じ地図帖に綴じられている「中國圖」が、「天地圖」同様占星術との結びつきを示唆していることを表している。「天地圖」、「二十八宿分應各省地理總圖」、「中國圖」が共に、同じ外觀を持ち同じ世界觀を顯していることを考慮する時、「天地圖」、「中國圖」は「二十八宿分應各省地理總圖」を模倣した図であり、『圖書編』所載の「二十八宿分應各省地理總圖」には、必ずその祖図となるものが中國に有るに違いない。それは、同じく『圖書編』に所載されている「四海華夷總圖」であると思われる。

しかし、「四海華夷總圖」の全体を参照したのではなく、中國を表わすその一部だけが影響を与えたと考える。何故なら、「四海華夷總圖」の中國部に書かれている十三省と、秦の始皇帝が建築したという中國の國境を示す線である「万里の長城」(遼東から臨洮)が、「二十八宿分應各省地理總圖」に酷似した形で表記されているからである。「二十八宿分應各省地理總圖」はその形態から、「四海華夷總圖」の中國部を切り取った図に、當時の世界觀を示唆する占星術を反映させたものに違いない。もう一つ、二図の關連を示唆するものを挙げるとすれば、黄河の源水と言われる「星宿水」がある。

この「星宿水」は「四海華夷總圖」の説文に、「黄河之源今伝星宿星海是也」と叙述されているものだが、「二十八宿分應各省地理總圖」の左端に図化されている。

以上の三つの共通点から「二十八宿分應各省地理總圖」は「四海華夷總圖」を祖図とするものと考えられ、また「二十八宿分應各省地理總圖」から影響を受けた「天地圖」及び「中國圖」も當然「四海華夷總圖」にその起源が求められるのである。「中國圖」が「二十八宿分應各省地理總圖」だけでなく「四海華夷總圖」も参考にしたと考えられる理由は、その韓半島の形にある。「中國圖」に描かれている韓半島は、「四海華夷總圖」に「弗懷」と書き込まれている半島に對称した形で描かれている韓半島に酷似しており、この事實から「中國圖」は、「二十八宿分應各省地理總圖」と「四海華夷總圖」の兩図を参照したと考えられる。「二十八宿分應各省地理總圖」も、もとは「四海華夷總圖」に起因していることを考慮すると、「中國圖」

がこの二図を参考にしたことは妥當な事實である。

このように「中國圖」及び「天地圖」の起源が「二十八宿分應各省地理總圖」及び「四海華夷總圖」の中國図部分に有することを考察すると、「天下圖」の由來が浮上してくる。

「天下圖」は今まで、西洋のT-O図またはアラビア輪狀図の影響によって、單円世界地図の様相を帯びているものと考えられてきた。何故なら中國及び韓半島では「天円地方」の世界観によって、地を四角いと認識していたため、地図を円形で描くことは不可能だと考えられてきたからである。だが『高麗史』『天文志』または『圖書編』『三垣二十八宿図位』の「天垂象」という表記から理解できるように、地に円い天の象を反映させて「天地圖」が示唆するような円形の地図が誕生するのである。「天地圖」はまさに「天円地方」の世界観を忠實に描き出しており、地である世界を一旦四角で囲み、天を表わすその周りを更に円形で囲んでいるのである。

以上の事實から「天下圖」の円形は、今までは「天円地方」の世界観によって不可能とされてきたが、實はむしろその反對に「天円地方」の世界観を有した東洋だからこそ可能な円形なのであり、西洋の地図にその源を求めなくともよい。「天地圖」と「天下圖」の關連がここで明らかになる。また「天地圖」が「四海華夷總圖」を参照したように、「天下圖」にもその痕跡が表われている。「天下圖」のもう一つの特徴である、人の横顔を連想させる様相は「四海華夷總圖」の説文に記述されている「人面肖之」(これは人の顔に似ている)という文章と一致する。また「天下圖」の韓半島の様相も「中國圖」同様「四海華夷總圖」のそれと酷似している。それに「天下圖」の余白には「天円地方」「二十八宿應地數」との記述が記入されており、「天地圖」との關連を窺わせる。無論この書き込みは図の製作後なされた可能性が高いが、記入者がこの図と「天地圖」とを關連させていたことは確かな事實である。「天下圖」には作者も製作年代も記されていないため、これ以上の確かなことは分からないが、その起源が西洋のT-O図ではなく、東洋の「天円地方」の世界観にあることは間違いない。それでは次に「天下圖」が示唆する世界とは如何なるものなのかを考察していきたい。

### 3. 「天下圖」に見える鄒衍の世界観

「天下圖」は、作者及び製作年代が明らかにされて來なかった。先行研究では、ただ仏教系世界図に触發された道教乃至は神仙的な世界観を示す図とされてきたが、その根據となるものが示されてこなかった。しかし、「天下圖」が仏教系世界図を繼承しているとは考えられない。何故なら、その説を否定する手掛かりとなるものが存在するからである。

朝鮮時代に天文、地理、律曆、卜筮に通達していた魏伯珪(1727-1798)という學者がいたが、彼が著述した『寰瀛志』に「利瑪竇天下圖」という名で「天下圖」に酷似した地図が記載

されている。この図は円形に囲まれていないだけで、その他の特徴は「天下圖」そのものであり、また「裨海九州外又九州齊儒之説有所是受利瑪竇天下圖」という説明が附されている。この「利瑪竇天下圖」という図がどのような性質のものなのか。まずこの図が記載されている『寰瀛志』の特徴から考察していくことにする。そのため、この書の序文である「新編標題纂圖寰瀛志序」の該当部分を以下に記載する。

林居多閑偶閱九九州圖。遂不勝自笑。曰此之爲無是烏有。雖未可知然。若以僻耳劣目強以疑之則或恐爲海鼈所笑也。遂模之于冊因係之。以中州十三省及我國八道地圖又以天地古今之間盈積禁論而難於記。認者彙列纂圖付之其不合而名之曰寰瀛誌。其付下諸圖雖非地圖之類然。若無是則宇宙爲虛。奪而地圖亦無所寓其用矣。故稱寰瀛而統之。嗚呼万猶不可盡而。圖則止於十數。

#### 【譯】

林居者が多閑時、九九州図を偶然閲覽して、笑いながらこの様な図は嘘であるという。若し、未だ知らない物だからといって、耳を塞ぎ目を背けようとするならば、海の鼈に笑われるだろう。遂に此に係わる中州十三省及び我が國八道地圖を模寫して冊に収める。天地古今中に禁論が盈積しており、記認するのが難しい。図を集めて名を付けて編纂し寰瀛誌とする。此に付されている地図は仮にも地図の類いとは言えないけれど、これらを否定することは、宇宙を虚物とし、地図からその用道を奪うことになる。寰瀛と称しこれらの地図を統する。だが万図を盡くせず十數枚に止まる。

以上の文から、魏伯珪はこの九九州図が地図の類いとは言えないけれども、林居の人達のように、この図を見て笑い耳を閉じ目をつぶって強いて疑おうとする態度は、宇宙を作り物としてしまい、地図また其の用道を失わせることになる」と指摘しており、この図に興味を付与していることが分かる。

即ち彼は九九州図が既存の地図と異なるために、世間の人々に一笑に付されることに疑問を投げかけ、この図にも価値があることを説いている。このように一般の人々には理解し難い九九州図は、何を起因とするのか。この図に付されている「裨海九州外又九州齊儒之説有所是受利瑪竇天下圖」という説文から、その起源を窺い知ることが出来る。この文を譯すると「裨海を有する九州の外にまた九州があり、これは儒の説と同じである。是を受けたものが利瑪竇の天下図である」という意味であり、この説が鄒衍の世界観から起因したものであることは明らかである。鄒衍とは、どのような人物なのか。彼は戦国時代の學者で齊の山東省の人物であり、陰陽五行説を唱え宇宙万般を陰陽五行の配合によって説明した、當時の陰陽家を代表する人であった。しかし、陰陽家であると同時に儒家でもあり、それは彼の「終始五帝徳」説によく表われている。五帝とは、秦王朝以前の王朝である

唐虞、夏、殷、周、秦の五帝を示すもので、各王朝に木徳、火徳、土徳、金徳、水徳を該當させたものが五徳である。一方、地理的には儒家の所謂禹貢の九州説に基づき、これを九乗することによって未知の世界を創造していた。そして中國は世界の八十分の一であるとの結論を示している。彼の著作としては『漢書』藝文志陰陽家類に鄒子四十九篇、鄒子終始五十六篇があるとされているが、現存しない。だが、彼の世界観を示唆する文章が『史記』の孟子荀卿列伝に記載されている。その文章は以下のようである。

其語閤大不經。必先驗小物推而大之。至於無垠。先序今以上至黃帝。學者所共術。大竝世盛衰。因載其禩祥度制。推而遠之。至天地未生。窈冥不可考而原也。先列中國名山大川通谷禽獸水土所殖。物類所珍。因而推之。及海外人之所不能睹。稱引天地剖判以來。五徳轉移。治各有宜。而符應若茲。儒者所謂中國者。於天下乃八十一分居其一分耳。中國名曰赤縣神州。赤縣神州內自有九州。禹之序九州是也。不得爲州數。中國外如赤縣神州者九。乃所謂九州也。於是裨海環之。人民禽獸莫能相通者。如一區中者。乃爲一州。如此者九。乃有大瀛海環其外。天地之際焉。其術皆類此也。然要其歸。必止乎仁義節儉。君臣上下。六親之施。始也濫也。王侯大人。初見其術。懼然顧化。其後不能行之。

【譯】

彼の理論は、非常に遠大で實際にそぐわず、往々にして先ず小さな事物を証據とし、それを推し廣めて廣大な事物として、さらに無限大の事物にまで達するのである。まず、當時から説きおこし黃帝の世にまで溯る。それは、學者たちが一致して説くところであり、さらに世の盛衰の大体を論じ、それにつけて吉凶の前兆や制度を記載し、それを遠く推し廣めて、天地の生ずる以前、暗黒でたずねることができないところまで達する。また、中國の名山、大川、通谷、禽獸、水産に繁殖する物、珍奇な物質をならべ、それを推し廣めて、海外にある、人間には見えない物にまで及ぼし、天地が分かれて以來の五徳の轉移によって、各々しかるべき政治制度があり、天が下す瑞祥それら人事に相應ずることを説いた。彼の考えでは、一般の儒者がいう中國とは、ただ天下の八十分の一の大きさにしか過ぎない。中國は赤縣神州とよび、赤縣神州の内にはそれ自ら九州がある。以前禹が畫した九州がそれである。これは、彼が言う「州」の數には入らない。中國の他に、赤縣神州のようなものが九つあって、これこそが彼の言ういわゆる九州である。そこには、小さい海が周りを取りまいていて、各州の人民や禽獸は皆互いに往來することができず、一つの區域の中に獨立するようなもの、これこそが一州である。このような州が九つある。そして大海があってその外を取り巻いていて、そこが天地のきわめなのである。彼の述べるところは、みなこういった類のものである。しかし、その節の歸着するところを考えると、必ず仁義儉約、君臣上下、六親の間の行事に行き着く。ただ、その説きははじめが非常に空漠として攔み所がないだけである。王侯大人は、初めて彼の學説を聞くと、驚きうろたえてその説に引き入れられてしまうが、やがて實行できなくなってしまう。

以上の文で、鄒衍は儒者の言う中國とは天下の八十一分の一に過ぎないとし、中國を赤縣神州と名づけ、その州の中にまた九州があって、以前禹王が畫した九州がそれに當たるとしている。また中國の他に、赤縣神州のようなものが九つあって、小さい海が周りを取り囲み、各州の人民や禽獸は互いに往來することができず、一區域の中に獨立しており、これこそが一州で、そして大海がその九州を取り囲むとしている。

『史記』は、このような彼の説はつかみ所がないけれど、その歸着するところは仁義節儉、君臣上下、六親の間の行事で結局は儒教と同じであると指摘している。

以上の鄒衍の世界觀は、何處からその發想が由來しているのか。中山八郎は、『列子』湯問篇、『莊子』秋水篇に依據して次のように述べている。

列史の湯問篇は殷の湯王と賢者夏革との問答を記したものであるが、その大体の要旨は、「世界を取り囲んでいる四海の外に何があるか」といふと、そこには中國と似たような國がある。どうしてそれが分かるかといふと無の極は有によって知られるわけであるから、東行して營に至れば具体的に營の人民の有様が知られ、それより東を問うことによつて亦た營に似ていることが知られ、西行して鹵に至り同様にしてその西が鹵と似ていることが知られるからである。四海の外は四荒も、その又外の四極も、これ同様にして知られる。故に大小相含みて窮極することがないのである」云々とあり、莊子の秋水篇を見ると河泊と北若との問答のうちに「四海に囲まれた世界の廣さを天地の廣さと比較してみると蟻塚が大沼の中にあるのと同じであり、中國の廣さを海内のそれと比べれば小米が大倉の中にあるのと同じである」といふ意味の言葉が記されている。このような内容が鄒子の世界像の構成とその發想法とに通ずるものがあることは、更めて説明を要さないであろう。また中山氏は同書で鄒衍の裨海、大瀛海の語義について以下のように言及している。明の楊慎の丹鉛雜錄によると「説文、裨接益也、以小益大日裨、西城伝有裨王、漢書有裨將、鄒衍書、四海之外、有裨海還之、書名有裨蒼、裨雅皆以小益大之義」とあり、裨海を以て大瀛海と比較して、より小なる意に解している。一方、大瀛海の方は東海中にあると伝えられる伝説上の神山、山境の一つたる瀛州に因んだものであろう。瀛州のことは紀元前二七九年に燕王が方士をして海に入りて之を求めしめ、後に秦始皇帝も同様のことをしたので有名であるが、列子湯問篇によると「渤海の東幾億万里か知れぬ所に歸墟といふ底無しの大壑があって、八紘、九野の水、天漢の流がことごとくに之に注いで、増すこともなく減ずることもなく、その中に岱輿、員嶠、方壺、瀛州、蓬萊の五山がある」と記されているから、大瀛海は恐らく瀛州などの神山があつた歸墟と称される端でもなく底もない大海を意味するものであろう。すると鄒衍の諸説は神仙説とも關係を有する<sup>11)</sup>。

以上のように鄒衍の世界觀は『史記』『列子』『莊子』などの儒書に起因すると同時に神仙思

11) 中山八郎「鄒衍の世界像-その解釋の変轉-」『大阪私立大學人文研究』11巻9号、(1960年)、pp.35-36。

想とも関連を持つ。『漢書』劉向伝によると、『淮南枕中鴻寶苑祕書』に「神僊物爲金之術鄒衍重道延命之方」との内容があったとされ、このことから鄒衍と神仙説との関連が窺い得る。また鄒衍の九九州説を引用した「裨海九州外又九州齊儒之説」との魏拍珪の認識から、鄒衍が儒者としても認識されていたことが分かる。しかし、その歸着するところが儒教と同一だとしても、『史記』に記述されているように、初めて彼の説を聞いた人は、あまりにも空漠とした説に、驚きうろたえることになる。そのため『論衡』『談天論』のような理解がなされてきた。この書では鄒衍の説を「奇怪で、聞いた者は目を丸くする。だが實否を確かめられぬままに、互いに閲讀、伝術して語り合っているだけだ。それゆえ、嘘と眞實が交じって世間に伝わり、眞偽の區別ができず、ふつうの人は戸惑いのあまり論争し合っている。(中略)いったい何處から、こんなことをいう材料を得たのか。禹の山海経や淮南子の地形篇を調べて、鄒子の著書をよく見ると、嘘でたらしめの語である」として、その説の荒唐無稽なことを説いている。このように認識されていた鄒衍の説が再び脚光を浴び始めたのはいつからなのか。

中山氏は前掲書で「漢代以後は荒唐無稽として論難され、たかだかその片言双句が時に學者文人に利用される程度に止まり、全大系についての信用を失った鄒衍の世界像は、近世になって西洋人の世界地理の知識が伝來するに及んで、再び全体として脚光を浴びるようになった」とし、鄒説を裏付ける試みとして黃式三(1789-1862)の著作『周季編略』を挙げている。その注に「史記、塩鐵論、論衡は皆な鄒衍の説を駁しているが、宋の皇極經世に天が子を開き地が丑を闢き人が寅を生じ各一万有八百年なりとあり、その外列子湯問編、莊子秋水篇及び近今の地球図などの説に見ても、天下の大なることは鄒衍の説に過ぎるものがある。儒者は自分にわからないことを非難すべきではない」との文があり、鄒衍の説が再び認定されたことが分かる。

以上、鄒衍の世界観を検討してきたが、「利瑪竇天下圖」は、その図に附されている「裨海九州外又九州齊儒之説有所受利瑪竇天下圖」との説文からも、鄒衍の世界像を地図化したものに間違いはない。それに鄒衍の世界観が依據する『列子』『湯問篇』に見える員嶠、瀛州、蓬萊の名も地図の海に記されている。

このような鄒衍の世界像を地図に顯わしたのは誰なのか。「利瑪竇天下圖」との地図名から、この図が利瑪竇によって描かれたものと推測できる。

利瑪竇(マテオ・リッチ、1552-1611)とはどのような人物なのか。彼は、イタリアのイエズス會士で、明末中國に渡り、中國イエズス會の基礎を築く一方、多數の漢文著作により近代科學思想を東洋に紹介し、また「坤輿萬國全圖」「天主實義」「幾何原本」などを著した人物である。利瑪竇の書籍が韓半島に伝來した時期は、17世紀の初頭で、イエズス會士によって漢譯された『天主實義』『交友論』『坤輿萬國全圖』などの書籍が北京を經由して伝來した。「利瑪竇天下圖」もこの時期に伝來したものと考えられる。

彼が中國に渡った時期は明末で、この時期は鄒衍の説が再考される時と一致する。「利瑪竇天下圖」の類図は現在中國では発見されていないが、この図を『寰瀛志』に記載した魏拍珪の説から、この図は利瑪竇に依るものと思われる。

利瑪竇はこの他にも「坤輿萬國全圖」という有名な地図を作成しており、彼の地図に対する関心は確かなものである。この地図が、朝鮮時代に伝来し、現在残存しているように多くの天下図類を誕生させていくことになる。実際「天下圖」には、「其衆大國八十一國近見略記」との記載から分かるように、「利瑪竇天下圖」が示した鄒衍の九九州説が継承されている。このように「天下圖」は「仏教系世界地図」を継承する図ではなく、儒者である鄒衍の世界観を継承するものである。この「天下圖」類が朝鮮時代に親しまれ多くの版を重ねる背景には、当時の朝鮮の「抑仏崇儒」政策が存在する。それでは次に儒者の世界観を通じて朝鮮は自國中心世界観をどのように成立させていったのかを考察することにする。

## 4. おわりに

朝鮮時代は、儒教を政治思想に採用し、仏教を弾圧する時期であった。朝鮮を築き上げた太祖李成桂の息子である太宗李芳遠は、「抑仏崇儒」の一策として、寺院の土地、奴婢などの数を法的に制限し、閉鎖した寺院の土地、奴婢を國家の財産とした。一方儒教振興のためには、儒教的な制度(集賢殿)を採擇し、儒教に関する書籍(『經國大典』『孝行錄』『三綱行實』)の刊行に力を注いだ。この時期は儒學に心酔した多くの儒者が誕生する時でもあるが、中央國立図書館所蔵の「天下圖」の手澤者である安鼎福(1712-1791)もその一人であった。しかし彼は前段階の朝鮮史學とは一線を畫していた。

その特徴を単純化して言えば、華夷的歴史觀を克服して、朝鮮を中心とした民族史觀を切り拓いたことである。彼の民族史觀は、師である李翼(1681-1763)のそれを継承したもので、李翼は安鼎福の質問に對して以下のように答えている。

今人生乎東邦。惟東事全不省覺。至曰東國通鑑有誰讀之其。乘戾如此。東國自東國。其規制體勢自與中史有別。

### 【譯】

今人は東邦に生まれながら、ただ東國の事は全く省みて覺えることなく、はなはだしくは誰が『東國通鑑』を讀むだろうか、という者さえいる。食い違いが此の如くである。東國はおのずから東國であり、その規制・体制は中國史とは異なる。

李翼は、朝鮮の多くの儒者が中国中心の華夷的史観に毒されていることを批判して、東國の史は中国のそれとは、別のものであることを力説したのである。安鼎福はこのような師匠の史観を受け継いでおり、彼が叙述した『東史綱目』では、檀君、箕子、馬韓を朝鮮古代史の正統を次ぐ王朝として位置づけている。また彼の文集である『順庵集』では以下のよ  
うに述べている。

東雖尊事大國奉其正朔而。地偏一隅自爲聲教。則與中國之諸侯有間矣。(中略)中國帝紀何  
關於東國乎。更思之本國壽既爲本紀。則中國當以外紀名之附于卷末可也。

【譯】

我が東國はたとえ大國を尊んでつかえ、その正朔を奉じ、地域は一隅に偏しているが、自  
ら聲教をなし、中国の諸侯とは異なる。(中略)中国の帝紀が東國と何の係わりがあろうか。  
朝鮮史の叙述においては、朝鮮を本紀とし、中国は外紀として巻末に付すべきである。

この文でも彼は、中国史を本紀とするべきではなく、朝鮮は自ら聲教を成している國で  
あるから、朝鮮史を本紀に据え、中国史を外紀にし巻末に添えるべきだとしている。

彼の民族史観は、彼が手澤していた地図にも顯われる。「天下圖」と同帖に收められてい  
る「東國八道大總圖」の余白には、彼の手書きだと見られている文章が書き込まれている  
が、その内容は檀君が降臨して朝鮮を築き上げた時から、箕子、馬韓、辰韓、弁韓、衛  
滿、新羅、高句麗、百濟、高麗、本朝(朝鮮)に至るまでの歴代始祖が書かれている。また  
三神山として崇められていた中国の瀛州、方丈、蓬萊山が朝鮮の漢拏、智異、金剛山に當  
てられている。このように檀君に溯り、朝鮮の独自の世界を見出す史観は、高麗時代に引  
き續き朝鮮時代でも息づくことになる。朝鮮時代、仏教に代わって國教として崇められる  
儒教、この思想に適合した地図として儒家の鄒衍の世界観を示した「天下圖」が普及されて  
いく。

韓半島と異なって、仏教的世界観によって自國確証を行なっていた日本では儒教が根を  
下ろすことはなかった。日本で「仏教系世界図」が長い間親しまれる要因は、仏教が西洋知  
識の流入後にも長い間親しまれたことにあると思われる。

李輔の墓誌から韓半島にも高麗時代に「五天竺國圖」という「仏教系地図」が今は現存しな  
いが、存在していたことが確認されている。この「仏教系地図」が朝鮮時代に継承されるこ  
となく消滅してしまった理由の一つは仏教勢力の衰弱であったと思われる。「天下圖」は、  
「仏教系地図」とは異なって印度を中心に据えておらず、元々儒教の説とされる九州説を  
図化したものであるから、「仏教系地図」が消滅した朝鮮時代、廣く普及されるのに適合し  
ていたのである。

以上、考察してきたように「天下圖」は既存の研究書が主張するような仏教系地図の影響、または西洋の単円世界図やアラビアの輪状地図の影響に依るものではない。この図の示す単円は、東洋の「天円地方」の世界観を顯している「天地圖」からの影響で、その円形の概観はT-O図とは関連がないと思われる。また地図の内容は「天下圖」と同一系である、「利瑪竇天下圖」を受け継いだものである。「天下圖」は、この図に表われる『大唐西域記』の地名によって、「仏教系地図」を継承したものとされてきたが、儒者である鄒衍の世界観を図化したものであることから、その説は否定されざるをえない。

「利瑪竇天下圖」に付されている「裨海九州外又九州齊儒之說有所受利瑪竇天下圖」との説文と、「天下圖」の外観とは一致しており、今まで疑問に伏されてきた「天下圖」の起源は鄒衍の世界観を地図化した利瑪竇(マテオ・リッチ)にあることが明らかである。「利瑪竇天下圖」が韓半島に流入した後、「天下圖」と同帖に収められている「中國圖」と「東國八道大總圖」(朝鮮半島が箕尾分野に該当している)が示すような占星術の影響によって「天下圖」は今のような円形の図に変化された。「天下圖」は常に図帖の一部に綴じられているため同帖に収められている他の図との関連は否めないものである。また「天下圖」が中國を世界の八十一分の一國としていることと同地図帖に収められている「東國八道大總圖」の性質(朝鮮半島における三神山の表記)及びこの図を手澤した安鼎福の書き込みから朝鮮時代の對中國認識を窺い知ることが出来る。

## 【参考文献】

- ・『星湖先生文集』15卷(1984)驪江出版社、p.290.
- ・李燦(1971)「韓國の古世界地図」『韓國學報』(一志社)、p.98.
- ・飯島忠夫(1939)『支那古代史と天文学』、p.57.
- ・中山八郎(1960)「鄒衍の世界像-その解釋の変轉-」『大阪私立大學人文研究』11卷9号、pp.35-36.
- ・室賀信夫、海野一隆(1962)「日本で行われた仏教系世界地図について」  
『地理學史研究』2(柳原書店)、p.86.

## 要 旨

本論文は中世の日本の世界観を代弁していた、三國世界観をあらわしている「仏教系世界地図」と比較して、同じく韓半島の中世の世界地図である「天下図」は如何なる世界観を示しているのかを検討したものである。「天下圖」は今まで、西洋のT-O図またはアラビア輪状図の影響によって、単円世界地図の様相を帯びているものと考えられてきたが、『高麗史』『天文志』の「天垂象」(地に円い天の象を反映させる)という表記から理解できるように、東洋の「天円地方」の天下観を表すものである。「天下図」は、そこにみえる地形や地名から、中國の陰陽五行説を唱え宇宙万般を陰陽五行の配合によって説明した、陰陽家兼儒家である鄒衍の「九九州図」を元にしてしていると思われる。その根據としては、「裨海九州外又九州齊儒之説有所受利瑪竇天下圖」との説文を付している「利瑪竇天下圖」が、朝鮮時代の學者である魏伯珪(1727-1798)の著書『寰瀛志』に記載されていることを挙げられる。利瑪竇の書籍が韓半島に伝來した時期は17世紀の初頭で、「利瑪竇天下圖」もこの時期に伝來したものと考えられる。彼が中國に渡った時期は明末で、この時期は鄒衍の説が再考される時と一致し、「坤輿萬國全圖」という有名な地図も作成していることから、彼の地図に對する關心は確かなものと思われる。このように「天下圖」は「仏教系世界地図」を継承する図ではなく、儒家である鄒衍の世界観を継承するものである。この「天下圖」類が朝鮮時代に親しまれ多くの版を重ねる背景には、當時の朝鮮の「抑仏崇儒」政策が存在する。「天下圖」の手澤者である安鼎福も有名な儒家であり、彼の民族史観は「天下圖」と同帖に收められている「東國八道大總圖」の余白に、檀君が降臨し朝鮮を築き上げた時から、箕子、馬韓、辰韓、弁韓、衛滿、新羅、高句麗、百濟、高麗、本朝(朝鮮)に至るまでの歴代始祖が書かれている点や、三神山として崇められていた中國の瀛州、方丈、蓬萊山が朝鮮の漢拏、智異、金剛山に當てられている点によく表れている。このように檀君に溯り、朝鮮の独自の世界を見出す史観は、高麗時代に引き續き朝鮮時代でも息づくことになる。朝鮮時代、仏教に代わって國教として崇められる儒教、この思想に適合した地図として儒家の鄒衍の世界観を示した「天下圖」が普及されていくのである。

キーワード：天下図、鄒衍の世界像、天円地方、利瑪竇天下圖、抑仏崇儒、民族史観

투 고 : 2005. 2. 28

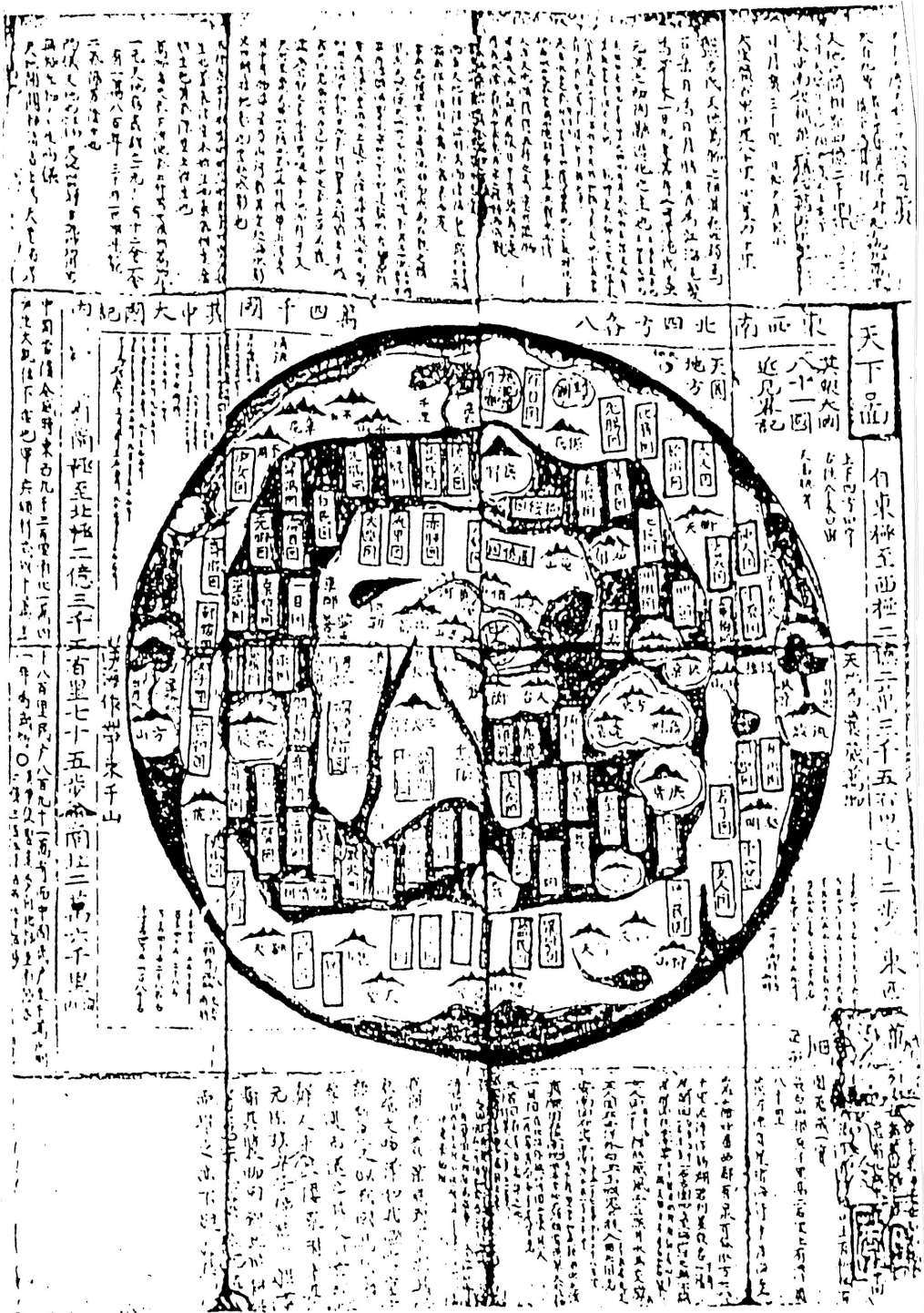
1차 심사 : 2005. 3. 12

2차 심사 : 2005. 4. 2

住 所 : 301-775 대전 중구 태평동 삼부아파트 32-122

電 話 : 042-537-5408

e-mail : shirijung@hanmail.net

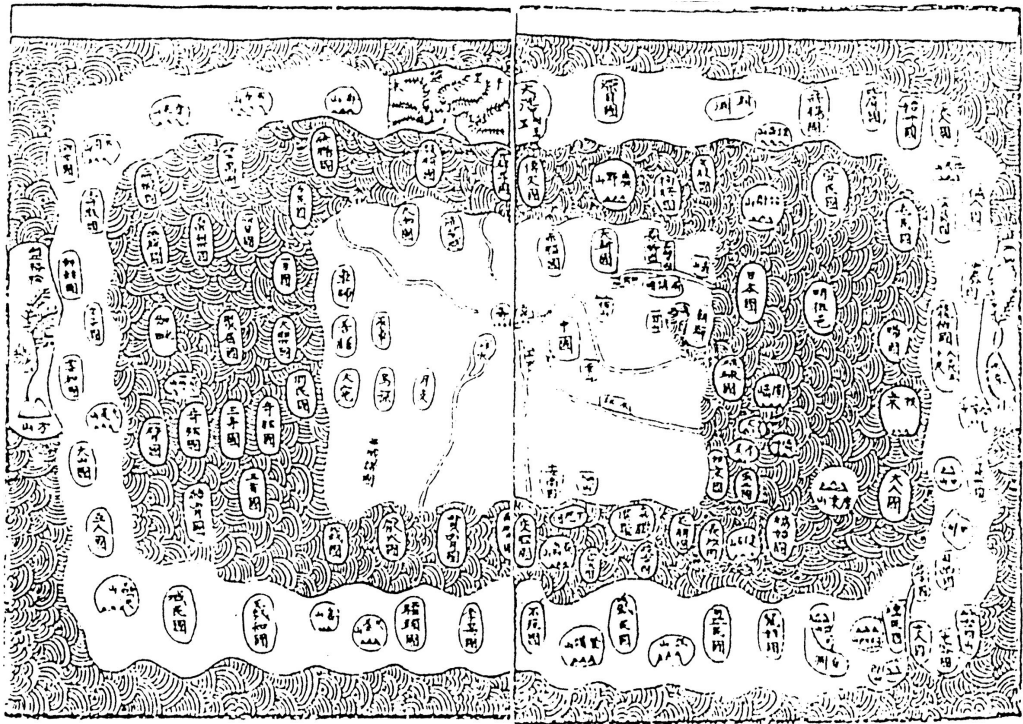


「韓國國立中央圖書館」所藏「天下圖」



「國立中央圖書館」所藏「東國八道大總圖」





『寰瀛誌』所載「利瑪竇天下圖」